

優秀賞

祖父の生きる力

八尾市立志紀中学校 三年 松原まつばら 由依ゆい

昨年の春、祖父が自宅で倒れました。夫婦で印刷業を営み、家の裏にある家庭菜園で野菜を育てることが唯一の趣味でした。毎年夏になると、必ずと言っていいほど祖父からの呼び出しの電話が鳴るので、私は急いで畑へ行き、抱えきれないほどの茄子やじゃがいもを収穫したものです。汗をかき、真っ黒に日焼けした太い腕はたくましく自慢の祖父でした。

その日祖父は、近所の店で知人と飲酒した後、自宅の風呂場で倒れているところを祖母が見つけたというこゝとでした。深夜一時頃、従姉からの電話で両親は急いで病院へ駆けつけました。脳の血管の一部が詰まった脳梗塞という状態で、身体の左側に麻痺が出ていました。幸い発見が早く、首の血管にカテーテルという管を入れる手術をしたおかげで、命に別状はなくひと安心しました。しかし左半身の麻痺が残った為、食べ物や飲み込むことも起き上がることも出来ないのです、リハビリを含め三ヶ月も入院生活が続きました。母や伯母も祖母と交代で付き添っていましたが、祖母は残された会社の従業員や仕事を放っておけないと、朝から電話応対や段取りに追われながらも、電車とバスを乗り継いで病院まで毎日通い詰めたそうです。

入院から一ヶ月を過ぎた頃でした。私が家族と祖父の見舞いに病院を訪れた時、車椅子に座り、首からエプロンを下げ、赤ちゃんの離乳食のようなドロドロの食事を作業療法士の方にスプーンで食べさせてもらっている祖父の姿が目に入りました。その姿を見ていた私は、あの穏やかで力強い祖父とは違い、無表情で一点を見つめたまま動かない人形のような姿に強い衝撃を受けました。そしてふとまわりを見渡すと、祖父と同じよう

に無表情のまま、向かい合った人と何か話すわけでもなく、黙々と食べ物や口を口に運ぶ患者さんばかりでした。病気は身体だけでなく人の心まで蝕んでしまうのかと、私は悲しみと怒りが同時に込み上げてきました。その様子をしばらく見ていると、祖父の仕事関係の古い友人が面会に訪れました。

「社長、具合はどうですか。」

と、その人が祖父の顔を覗き込みました。すると祖父は、今までの表情とは一変して、目を見開き、背筋を伸ばし、口を精一杯動かして話そうとしている様子に私はとても驚きました。

「早く元気になって下さい。みんな待ってますから。」

その言葉を聞いた途端、祖父の顔の筋肉が緩みくしゃくしゃになって涙がこぼれ落ちました。

「ありがとう。ありがとう……。」

あまりの表情の変化の激しさと、泣いている弱気な姿を見て私は一瞬戸惑いましたが、その反面責任感やプライドといった埋もれかけていた気持ちを感じる事ができ、とても嬉しくなりました。

それからまた一ヶ月経ったある日、また面会へ訪れるとちょうど夕食の時間だったようで、祖母が祖父のエプロンを着けてあげたり、口からはみ出たおかずをティッシュで拭いたりしていました。すると祖母は、祖父と向かい合った患者さんまでも心配になったのか介助し始めたのです。その時、その患者さんは祖母の手を払いのけ、表情をこわばらせ不快感をあらわにしていました。しばらくして祖母は私に暗い表情でこう言いました。

「さっきは悪いことしたな。」

私は何か言ってあげる言葉が見つかりませんでした。ただ祖母はもともと社交的で明るく、誰にでも世話を焼くのが好きで、決して哀れとか惨めといった気持ちではなかったという事は充分わかっていました。

日常生活に支障がある人でも人としての尊厳があります。他人であっても人格を尊重しなければいけません。病院関係者や介護に携わっている方々の中にはなかなかありませんが、人への接し方に気を付けなければい

けないと思いました。祖父は自分が人から必要とされていると感じたり、大切にされていると感じたことで、それがまた新しい力を作り出すということを証明してくれました。今年の夏も祖父の畑にはたくさん野菜が育っています。